

雨が降る。

乾いた街を湿らすように、生暖かい雨が降る。

千宏は雨が嫌いだった。

すっかり泣きはらした様子で千宏が浴室から出てくると、テペウは黙って千宏に温めたミルクをよこし、ソファに腰掛けるように促した。全ての気がそげたとでも言うように、すでに頑丈そうな皮のズボンをはいている。

千宏の手には大きすぎるカップを受け取り、ソファに座って一口すすると、風呂と大泣きで失われすぎた水分が体にじわりと染み渡って行く。

そして、テペウは唐突に切り出した。

「まあ……呪いなんだよな、いわゆるよ」

巨大な体を小さく丸めて、テペウは立派な尻尾でぱたぱたとソファを叩く。

「女を泣かせるってのが、生理的に受け付けねえ。よがり泣きってのはいいだが……あー、あれだ。なんか、罪悪感に作用してうんぬんとか抜かしてやがってな。まあ、二百年近く前の話なんだけどよ」

女が泣いていると言う事実より、自分が泣かせたという認識が、どうもテペウには大きな打撃となるらしい。ともかく、千宏はテペウに呪いをかけた人物に心から感謝した。

「あれだ……ネズミが死んでからしばらく荒れててな……まあ、トラの女に手えだしてる分にはよかったんだが……他の種族の女に手え出して回ってたら、地雷踏んじまってよ」

ヘビの女だったなあ、とテペウは呟く。

死の商場で出会ったというヘビの女は、どういうわけかテペウを真剣に愛したらしい。無論テペウからしてみれば、遊びに過ぎない女であった。捨てる、という意識もなく、当然のように終わりを告げたテペウの前で、ヘビの女はごく静かに泣いたと言う。

「殺してやりたいほど憎いのに、まだお前を愛してやまない。だから命までは奪わないでおいてやろう。しかしお前は女の涙に身の毛がよだち、おののくようになるだろう。一生へつらい生きていけ。お前が弱いと侮る者に、お前は膝を折ることしか許されん」

一言一言、噛み締めるようにテペウが言う。それから、女はこええなあ、とわざとらしく身震いした。

「ネコに聞いたら、そんなに強い呪いじゃないから、その気になればどうとでもなるらしい。だけどよ、まあ、そんではいはい呪いを解いちまったら、あのヘビ女に対する裏切りだろ？ あいつはわざと、解ける程度の呪いをかけた。俺が一生この呪いを背負ってくださるって信じてな」

きっとこの呪いが強力で、解くのに命の危険が伴うとなったら、テペウは迷わず呪いを解こうとしただろう。だがあえて解けるようにしたというなら、背負って行くのがトラの流儀だ。

本当に、この種族はなんだって勝負ごとにしてしまう。

千宏はミルクを飲み干すと、静かにテペウに歩み寄った。喉を指差して口を動かすと、忘れていたと言うようにテペウが千宏の眼前に指をかざす。

軽く指を振っただけで、テペウは短く「終わりだ」と告げた。声を出してみると、なる程確かに声が出る。

「帰るんだろ、送ってやろうか？」

言って立ち上がろうとしたテペウの肩を静かに押さえ、千宏は再びテペウをソファに座らせた。きょとんとして、テペウが目を瞬く。

「まだ仕事が終わってない」

啞然として、テペウは目を見開いた。

「だっておまえ……さっき……」

「さっきは、あんたが変な事言ったからあんなったんだよ。あたしはあんたに抱かれる。あんたはあたしにお金を払う。その約束を破らなければ、あたしはあんなふうに泣いたりしない」

テペウの尻尾が大きくソファの表面を叩き、それきりぴたりと沈黙する。雷が鳴ったが、千宏は気にしなかった。

「……なんのために、そこまで金がいるんだ？」

千宏は顔を顰めた。

「関係ないでしょ」

「俺だって昔話をしただろうが、こんどはお前の番だ」

確かに、千宏はテペウの過去を聞いた。だからといって千宏が自分の目的を語る必要は無いが　それは、トラの流儀に反する気がした。

「子供が欲しいの」

「子供だあ？」

「それにはヒトのオスがいます。年はとっても構わないけど、不細工な男じゃだめなんだ。だから凄くお金がいるの」

「なんのために」

「そこまで教える必要はないと思うけど……」

まあ、いいだろう。なんとなく話してもいい雰囲気だった。

「あたしね、あるトラに拾われたんだ。国境がある山沿いの森に住んでるトラで」

「国境の守護者か？」

驚いたように訊ねたテペウに、千宏も驚いたように頷く。

「知ってるの？」

「国境の守護者は三人いる。どいつだ」

「パラムっていうんだけど……」

テペウは笑った。

「そりゃすげえ！ 門番か！」

門番？ と千宏は首をかしげる。

確かにあの要塞には、巨大な扉が一つある。

「山沿いには三人の守護者がいる。そいつらはそれぞれ与えられた範囲を守っててな。北にイヌの国を見て、西に一人と、東に一人。そして中心に一人だ。その中心が一番イヌに攻められやすい地形をしてて、ここを守るトラが門番と呼ばれてる」

はあ、と千宏は頷いた。随分と

「くわしいんだね……」

「トラの戦士なら誰でも知ってる。国境の守護者は国一番の強者だ。おまえ、とんでもねえ奴に拾われたな！」

恐れ入ったと、テペウがゲラゲラと笑う。しかしふと何かに気付き、訝るように千宏を見た。

「……じゃ、なんでおまえはここにいるんだ？」

「だから子供が欲しいんだって」

「そりゃ分かってる」

「あたしはさ、あと数十年もすれば死ぬでしょう？」

「まあ、そうだな」

「そうすると、あいつらきっと悲しむ」

テペウは未だに張り付かせていた笑みを消し、再び真剣に千宏の瞳を覗き込んだ。

「だけどあたしに子供がいれば、その子供が子供を産んで、あたしの血はずっと生きていけるでしょ？ そしたら、あいつらはあたしの子供を愛してくれて、笑ってあたしの死を思い出せる。だからあたしは子供が欲しい」

「わからねえな。飼い主に言やあ、オスヒトの一匹くらい、手に入れてもらえるだろうが」

千宏は首を左右に振る。

「それじゃ、あたしはペットになっちゃう」

「……なに？」

「自分の力でやらなきゃ意味がない。あんたは笑うかもしれないけど、あたしはトラになりたいんだ。全部与えられて、ぬくぬくと生きているのはトラじゃない。そうでしょ？」

飼い主にねだって交配相手を与えてもらい、子供を産むのが最も確実な手段だ。だがそれでは、千宏は誇りを手放してしまうことになる。

「だからあたしは、全部自分で手に入れる。全部自分で手に入れて、全部あいつらに与えてあげる。それであたしは、やっとあいつらと同じになれる。トラになれるんだ」

また、雷が鳴った。ひどく大きい。落ちたのかもしれない。

雨はますます激しく振り、部屋には沈黙ばかりが落ちる。

テペウは何も言わなかった。

「……名前、なんつったか、お嬢ちゃん」

「千宏」

そうか、とテペウは笑った。

「あんまりそそる事言うもんじゃねえぞ。本気でお前が欲しくなっちゃう」

「そしたらまた大声で泣き喚いてやるもん」

「魔法で声を封じられたらどうする？」

「それって、あたしに負けを認めてることにならない？」

テペウは今度は声を上げて笑った。

「そりゃそうだな。ああ、そりゃそうだ。そんなんじゃ意味がねえ。そんなやり方はトラじゃねえ」

内心、千宏は安堵に胸を撫で下ろした。

テペウはトラだ。意地と誇り重んじる、馬鹿馬鹿しいほどに真っ直ぐなトラの男だ。

「それじゃあ、俺はどうすりゃいい。楽しませてくれるんだろ？」

その言葉を合図に、千宏は素肌の上に巻きつけていたローブの紐を解いて床に落とした。ソファに座るテペウの前にひざまずき、ズボンに手をかける。

流石に風呂上りにベルトまでは締めておらず、三つ縦に連なったボタンも一番上ははずしてあった。ヒトメスの力では少し固いボタンを苦労してはずし、千宏はようやくテペウのものを引きずり出した。

躊躇せず睾丸を口に含み、舐め転がしながら陰茎をさする。へえ、とテペウが意外そうな声を上げた。

「妙な感じだな。ヘビよりはあったけえが……」

ひやりとするほどではないが、暖かいとは感じない、それがトラとヒトの体温の差だ。

舌はヘビのように長くはないが、イヌのように滑らかで柔らかい、鋭い犬歯も存在せず、繊細にやわやわと、丹念に、丁寧に舌を使う。

「攻められるのは趣味じゃねえんだがな」

「攻められてると思わないで、奉仕されてると思えばいいんじゃない？」

言って、千宏は大きく口を開けて怒張の先端を含む。そうするとテペウの長い尻尾が伸びてきて、くすぐるように千宏の頬を撫でた。

「もういい、口に出すのは好きじゃねえんだ」

「そう？ そりゃ残念」

儲け損ねちゃった、と唇を尖らせた千宏に、テペウは気分を害した風もなく笑う。

促されてソファに上がり、テペウの腿をまたいで膝立ちになる。そうすると、大分テペウの顔が近くなった。一文字に走る傷の部分は、体毛が生えていない。

「濡らして、たくさん、でないとかかなり辛いから」

テペウは答えず、千宏の背に手の平を滑らせた。その手が下へ下へと下がって行き、尻を行過ぎて探るようにその奥に触れる。

「ヒトに触るのは初めてなんだ」

「うん」

「こええな……でっけえ猛獣より何倍もこええ」

傷つけるのを恐れるように、テペウは指の腹でゆっくりとそこをなぞった。男に慣れた千宏の体は、それだけでじんわりと濡れてくる。

そのまま中へと入り込んできた太い指に、千宏は声を殺してテペウの胸にしがみ付いた。ゆるゆると、確かめるようにテペウの指が何度も何度も出入りする。いつの間にか二本に増やされた指の圧迫感に、千宏は喉を反らせて吐息を零した。

「痛くねえか」

「ぜんぜん……へいき……きもちい……っ」

すると、指の動きが早くなる。

トラは、行為の最中も平然と喋り続けるのが普通だった。だがテペウはほとんど喋らず、部屋には千宏の声と雨の音と、それとは別種の水の音ばかりが響く。

溢れた愛液が内腿を伝って流れ落ちるほどになると、テペウは背を丸めて千宏の耳元に口を寄せた。

「どうだ？ まだ足りねえなら、舐めてやってもいいぜ」

言って、千宏の中から指を引き抜き、絡みついた愛液を美味そうに舐めてみせる。千宏は快楽に疼く体を小刻みに震わせながら首を振った。

「もう、大丈夫……いいよ……いれ……て」

「そうか？ そりゃ残念だ」

先ほどの千宏の言葉をそのまま真似し、テペウは千宏の腰を引く。

ゆっくりと言うよりも恐る恐るといった様子で、テペウはゆるゆると、針に糸を通すような慎重さで千宏の中へと押し入った。

「あ……すご……あつ……い」

呻くように言って、千宏は歯を食いしばる。

痛みは無いが、大きすぎる圧迫感に息が詰まった。苦しくてもがくようにテペウの肩に爪を立てると、テペウは体を折り曲げるようにして身を伏せ、千宏の腕を自分の首の後ろへと導く。

差し出された舌を躊躇なく受け入れて、千宏は犯すように口腔を翳られながら自ら腰を揺すり始めた。

不思議な気分だった。

テペウは千宏を快楽で屈服させようとはせず、かといって快楽を得ることに躍起になっているわけでもない、安心し

て体を任せられるトラは初めてだった。アカブに抱かれている時さえ、千宏は時々壊されるのではないかと怖くなったというのに。

「は……あ……うあ、ひ……」

唇を開放されると、甘く震えた声がこぼれた。息苦しさはいつの間にか消えていて、上り詰めて行く快樂だけがじりじりと千宏を焦がす。

「いく……あたし、も……テペウ、あ……あ……もう、いきそ……」

「そうか？ それじゃ……」

言うなり、テペウは大きく腰を揺すって千宏の奥を貫いた。

目のくらむような快樂が、千宏の全身を突き抜ける。

「うぁぁぁ！ そ、おく……だめ、いく……！ も、だめ、だめ……あ……っ」

食いちぎらんばかりに締め付けた千宏の中で、テペウのものが大きく脈打ち、溢れるほどに白濁が注ぎこまれた。どろりとした灼熱が胎内を満たし、千宏は歯を食いしばって快樂の余韻をやり過ごす。

それからくたりとなつてテペウの胸に額を押し付け、千宏はぞくぞくと肩を震わせた。

「だから言っただろう？ 俺は紳士だってな」

そう言ってテペウは笑い、ベッドに寝転がって体を休める千宏の髪を弄んだ。

事が終って身なりを整え、金銭の取引も全て終えた後である。

「紳士って言うか……トラに抱かれた気がしない」

と言うよりも、と千宏は思う。

「テペウ、ほんとに気持ちよかったの？」

「なんだ、そりゃ」

「だってなんか……凄く気を使ってもらった感じ」

あのなあ、とテペウは笑う。

「俺はもう四百近いんだぜ？ そりゃちったあ落ち着きも出てくるだろう」

「よ」

千宏はあんぐりと口を開け、まじまじと傍らのトラを見た。

「今年で三百八十九になる。盛って腰振る以外にも、楽しみ方ってのを知ってるんだよ」

べしゃりと、千宏は完全にベッドに突っ伏した。千宏が軽く四回は死ぬる月日を、この男は生きてきたのだ。百何十歳だ、二百歳だと聞かされた時に頭が痛くなるというのに、さらにその倍近い年月をトラは平然として生きる。

「あたし、何代世代交代すりゃあいつらに追いつくわけ……？」

少なくとも、十代程度では追いつかないのは確かであった。脱力する事この上ない話である。

その時、部屋に激しいノックの音が響き、千宏は文字通り飛び上がって驚いた。

「お……お客さん？」

「のようだな」

面倒くさそうに言って、テペウはのそりと起き上がる。楽にしていると仕草だけで千宏に伝え、テペウはのしのしと玄関へ向かった。

特に誰何の声を上げるでもなく、無造作にドアを開ける。

瞬間、白刃が空を切った。てしかしテペウは微動だにせず、面倒くさそうな表情はそのままに扉の向こうの人物を見る。

「よう、遅かったじゃねえか、イヌの兄さんよ」

ハンスであった。抜き身の剣をテペウの首にひたと当て、牙さえ剥いてテペウを睨む。

「チヒロを返せ」

テペウは思わず吹き出した。

「返せだ？ なんだ、チヒロはてめえの持ち物か？」

「雇い主だ」

「だったら、てめえに返す道理はねえな。違うか？ 実力で守るのがてめえの仕事だ」

「テペウ！」

ハンスの更に後ろで声があった。テペウがそちらに目を向けると、女を連れたトラの男が立っている。ブルックだ。その隣の女はカキシヤといい、テペウが部屋に招いた事もある美女である。

ははあ、とテペウは頷いた。

「お前が連れてきたのか、カキシヤ」

「あら、いけなかった？」

「この状況を見ながら、よくその台詞が出るな。惚れ直すぜ」

「おだててもだあめ。今日はあたしはブルックの貸切なの」

真っ赤な唇を意味深に舐め、カキシヤはブルックにしなだれかかる。

「それで色男さんよ、お前はまた、なんだっってここにいる？」

「おまえが千宏をさらったって聞いてな」

「護衛はもうやめたんだろが」

「そうだが、トラをやめた記憶は無い」

「そうか？ そりゃ安心したぜ。だがはいそうですかって返すわけにゃあいかねえな。俺はあの女が気に入った。護衛をやめたってこたあ、お前らにはあの女を守る義務も権利もねえってことだ。権利があるのは……」

言って、テペウはハンスの首をつかむ。突然の攻撃に面食らったハンスの体を、テペウはそのまま室内へと放り込んだ。

何かに衝突したのか、ぎゃん、と甲高い悲鳴があがる。

「あのイヌの兄さんだけだ。帰ってカブラに伝えな。チヒロはイヌともども俺が大事に飼ってやるってな」

初めて、ブルックは険しい表情でテペウを見た。その隣で、面白そうにカキシヤがにやにやと二人の男を見比べる。

「あんた、俺たちに何を期待してるんだ」

「勘違いするんじゃないよ。ただ、伝えておくのが礼儀だと思ってるだけだ。例え今更護衛を続けると言ってきたって、俺はあの女を返す気は全くねえ。わかってたはずだぜ？ こうなるってよ。分かっててあの女を放り出したんだろ？ 違うか？」

「チヒロになにかあったら、カブラはあんたを殺しに来るぞ」

「おいおい、お前らが放り出したヒトのお嬢ちゃんを、俺が哀れに思って保護してやったんじゃないかよ。感謝されこそすれ、何で俺が殺される？」

「カブラが放り出したんじゃないか。チヒロが俺たちを切ったんだ」

テペウは笑った。

「同じ事じゃねえかよ。お前らは護衛をやめた。その結果何が起こるか、十分想像できたにもかかわらずな。つまりお前らは、そうなってもいいと思って、大人しく引き下がったんだ。違うとは言わせねえぞ。てめえらはチヒロより自分の意地と誇りを取った。だったらてめえらはそれを突き通せ。それがトラの流儀だ」

放り出しておいて、危なくなったからと言って『やっぱり守る』は通じない。守ると決めたら何があろうと守り抜かなければ、それはトラの男じゃない。

「失望したぜ。だがありがとうよ。おかげでいいもんが入った。そう心配すんな。ちゃんと最後まで可愛がってやるからよ」

じゃあな、とカキシヤの頬をひとなでし、テペウはあくまで穏やかに扉を閉めた。ブルックはその扉を睨んだまま微動だにしない。

「状況はよくわっかんないけどさあ」

カキシヤは考えるように天井を仰ぎ、それからちらとブルックを見る。

「放り出したって、後で欲しくなったら全力で取り返すのがトラよね？」

外は雨が降っている。

明日には森で狩がある。

千宏はテペウと共にあり、しかしハンスも側にいる。

「行くぞカキシヤ」

ブルックは、歩き出した。

「あら？ いいの？ 扉ぶち破るんだったらあたし手伝うわよ？」

「いい。テペウはチヒロを名前前で呼んだ。ってことは そう酷い状況じゃねえ」

あらそういえば、とカキシヤは呟く。

「それって本当はかなり本気ってことじゃない？ じゃ、あんた達に護衛されてるよりずっと安全かもしれないわね」

[前へ](#) [次へ](#)